



サグラダ ファミリア Sagrada Familia (抜粋版)

カトリック水戸教会会報 2020年2月号

祈り

水戸主任司祭 ウィリアム・ドネガン神父

イエスは、病者とハンディキャップを持った人々にとても人気がありました。その人々が住んでいる所を訪ねた時は特にそうでした。人々は癒しを求め、イエスが手を置き、祈って下さることを願いました。時々、あまりにもたくさんの人々が願いを求めてやって来るので、イエスはどこにも行けず、休息の場所を見つけることが出来ませんでした。イエスはしばしば、誰からも離れて静かな祈りの場所に行くことがありました。祈りは、イエスの力の源でした。イエスは有名になりすぎるまで、一つの町に留まるということは決してありませんでした。弟子たちがイエスに、どのように祈ったらよいかを尋ねた時、イエスは彼らに教えます。「祈るときにはこう言いなさい。『父よ、御名が崇められますように、御国が来ますように……。』」(ルカ 11.2)

ひとり一人にあった祈りがあります。黙想のための祈り、個人的な、また共同の祈り。ある人たちは、祈りの生活を励ます霊的な読書をするのが好きですが、またある人たちは、ロザリオや伝統的な祈りを好みます。祈りに時間を費やすことによって、日々の生活の中で、力と勇気の源が与えられ、元気にもなります。祈るとは、時間をとって神様が私たちに求めることは何でも受け入れながら、神様の御手の中に自分自身を委ねることなのです。

神様は私たちに提案されます。神様の業を私たちが行なっていると自覚しながら、困っている人々を助ける時、自分の中に力が増していることを感じます。祈りによって心の喜びが与えられ、神様への、自分自身への、そして隣人への愛が増えていきます。

私たちは、いつでもどこでも、例えば電車の中でも車の運転中でも、自転車に乗っている時も、何かのために行列に並んでいる時でも祈ることが出来るのです。

神様のための時間をとることは、必ず報われます。

皆さんに、神様の祝福がありますように。



病者の塗油の秘跡

2月11日(火)は、世界病者の日 10時から『いやしのミサ』で【病者の塗油の秘跡】が行われます。そこで 救いの営みにおけるこの病者の塗油の秘跡の根拠をカテキズムからご紹介します。

人生における病気---

私たちの周りには、病気で苦しんでいる方が大勢いらっしゃいます。私たち自身も病気になり、自分の限界、無力さなどを体験したことがあると思います。重い病気であればあるほど、人生の終わりである「死」をかいま見たり、考えさせるものです。

そうだからこそ、病気にかかった人は、不安や自暴自棄に陥ったり、あるいは、その逆に、病人が精神的に成熟するのを助けたり、物事の本質に目を向けさせたりもします。さらに、病人が、神を探し求めたり、神と出会ったり、神に立ち返ることもしばしばあります。

神の前に生きる病者---

旧約時代、人々は、病気を神とのかかわりの中で受け止めていました。ですから、旧約聖書には、神に背いたから病気になったのだと考えている表現がしばしば出てきます。ですから、病気のこと、神に嘆き訴え、祈りをささげていました。そして、神に忠実に生活すれば、健康を取り戻すという体験もしています。

医者であるキリスト---

では、新約時代はどうでしょうか。キリストは、病気になって苦しむ人々の友となってくださいました。病人をいやされることによって、キリストは神が私たち人間を訪れてくださり、神の国が近づいたことをはっきり示してくださいました。

イエスは、肉体の病気をいやされるだけでなく、罪をゆるす権威をも持つ、真の意味での「医者」でした。実際、キリストは、「医者を必要としているのは、病人である」とおっしゃっています（マタイ 9.12）。

イエスがなさった最後の審判についてのたとえ話が、マタイ福音書の 25 章に書かれています。その中で病人を見舞った人に対して、「私が病気のときに見舞ってくれた」と、病人とご自分をまったく同一視なさっています。

また、イエスはいやしを求める病人に、信じることを求められます。イエスはいやしのために、しばしば、按手や沐浴、泥やつばなどのしるしを用いられました。病人もイエスに触れようとしました。今もキリストは、同じように、秘跡を通して私たちに触れ、私たちがいやしてくださいています。

イエスは、人々の苦しみを見、決定的ないやし・治癒を、ご自分が十字架上でいのちをささげることによって実現なさいました。それは、キリストの死と復活による罪と死からの勝利です。この十字架での受難と死を通して、キリストは、苦しみに新たな意味を与えられたのです。それは、苦しみは私たちがキリストに似たものとし、キリストのあがないの苦しみに、私たちが一致できるようになったということなのです。

病者の塗油について詳しくは、続いてカテキズムをお読みください。

聖体の秘跡

主の奉献も過ぎ、灰の水曜日も間近です。四旬節の準備に【聖体の秘跡】についてカテキズムから紹介します。

聖体拝領の実り

カトリック教会のカテキズム：P 403～430

聖体拝領は、私たちにすばらしい実りをもたらしてくれるものです。その実りは、キリストとの親密で、緊密な一致です。キリストは、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしのうちにおり、わたしもまたいつもその人のうちにいる」と約束してくださいました（ヨハネ 6.56）。

私たちが毎日、いただいている食事のことを考えてみてください。食べ物は私たちの血となり肉となって、私たちの肉体的生命を生かし、維持してくれます。それと同じ様に、イエス・キリストの体と血であるご聖体を拝領することによって、私たちは霊的いのちを新たにされ、維持し、成長していくのです。

聖体はよく「旅路の糧」と言われます。霊的いのち・キリスト教的いのちをいきいきと保ち、成長させるためには、「旅路の糧」である聖体を、私たちの生涯の糧とする必要があります。そのために、昔から、旅に出る人がお弁当を持って行くように、人生という旅路を歩いていくためには、「糧」である聖体が必要なのです。ですから、私たちが決定的にキリストと出会う死の時にこそ、「旅路の糧」である聖体によって強められる必要があります。そのため、聖体が病者に授けられるのです。

さらに、聖体拝領の実りの一つは、私たちが罪から離れさせることです。十字架上でキリストはご自分のいのちを、私たちの罪をあがなうためにささげてくださいました。私たちが、聖体を拝領し、このキリストに一致するとき、私たちが犯した罪を清め、これから先、もう罪を犯さないように守ってくださるのです。

食事をとり、私たちが体力を回復するように、聖体を拝領することによって、私たちが日常生活の中で、弱くなってしまった神への愛を再びよみがえらせ、強めてくれます。活力を取り戻したこの愛は、私たちが犯した小罪を消してくれます。こうして、キリストは私たちのうちにあって、さらに深くご自分と一致させてくださるのです。

キリストの御からだをいただくことにより、キリストと深く一致し、わたしたちのうちに愛が燃え立たせられます。こうして、キリストは私たちが、今後、大罪を犯さないように守ってくださるのです。

大罪は、神との関係、キリストとの絆を断ち切ることです。ですから、聖体を拝領し、キリストと一致することは、罪の状態とほど遠い存在に、自分をおくことになるのです。他の実りは、神秘体の一致を生み出し、教会をつくりあげるといふ恵みをもたらしてくれます。

洗礼の秘跡によって、私たち信者は、ただ一つの体を形作るように召されました。ですから、聖体を拝領する人は、洗礼によるこの招きを実現し、私たちを教会というただ一つのキリストの体に結び合わせるのです。

聖パウロはコリントの信徒に対して、「わたしたちが裂くパンは、キリストのからだにあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つのからだです」と美しく説明しています（コリント 1 10.16~17）。また、エウカリスチアは、貧しい人々との連帯を強めさせてくれるものです。マタイ福音書の有名な最後の審判についてのたとえ話の中で、イエスは、ご自分を、貧しい人、困難のうちにある人々と同一視なさいました（マタイ 25.31~46）。あなたたちは、兄弟であるもっとも貧しい人々のうちに、キリストを認めるように招かれているのです。

エウカリスチアおよびキリスト者の一致

エウカリスチアの神秘の偉大さを前にして、聖アウグスチヌスは「ああ、何とすばらしい敬神の秘跡、何と崇高な一致のしるし、何と尊い愛のきずな！」と叫びました。エウカリスチアは、キリストに一致させる恵みをもたらすものです。このことを考えるほど、キリスト者の間に一致がなく、主の食卓を共にできないことは、大きな悲しみが迫ってきます。ですから、キリストを信じるすべての人々が、再び完全に一致することができるよう、キリストに祈ることが、私たち信者に緊急に求められています。

「来るべき栄光の保証」であるエウカリスチア

キリストの聖体の祭日の「教会の祈り」の中で、聖なる宴であるエウカリスチアが、「来るべき栄光の保証」をあたえてくれる、と教会は祈っています。

エウカリスチア（感謝の祭儀・ミサ）は、キリストの過越の記念であり、私たちは、聖体を拝領するとき、「天の祝福と恵み」に満たされます。ですから、エウカリスチアは、「天の栄光」を先取りするものです。私たちは、感謝の祭儀（ミサ）が行われるとき、司祭が次のように典礼文を唱えるのを聞いています。

「救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んで」、「わたしたちもいつかその国で、いつまでもともにあなたの栄光にあずかり、喜びに満たされますように。そのときあなたは、わたしたちの目から涙をすべてぬぐいさり、わたしたちは神であるあなたをありのままに見て、永遠にあなたに似るものとなり、終わりがなくあなたをたたえることができるためです」と。エウカリスチアは、この大きな希望、新しい天と地の希望の、もっとも確実な保証、明白なしるしなのです。

ピット セニョール！ビバ サントニーニョ！

1月の第3日曜日、フィリピンのセブではキリストの子供時代を指す「サントニーニョ (Sto. Nino)」を讃えるお祭り「シヌログ祭」が行われます。華やかな衣装で着飾った踊り子たちが、サントニーニョ像を抱えて踊りながらセブの街を練り歩きます。セブ市内にサントニーニョ教会があります。1565年、スペイン統治下で建造されたフィリピン最古の教会です。この教会にサントニーニョ像が納められています。サントニーニョ像は幼少時のキリストの立像で、16世紀に世界一周の途中でマゼランがセブ島に上陸した際に当地の王に授けたものです。1月19日、水戸教会でサントニーニョに捧げるミサが執り行われました。ミサの後、皆がサントニーニョ像をかかえ、「ピットセニョール！ビバサントニーニョ！」と掛け声をかけながら、お御堂の中を踊りながら行進しました。2015年1月18日大雨の中、マニラ市内のリサール公園を中心に集まった600万人の信徒の前でミサを捧げた教皇フランシスコの姿を憶えていらっしゃるでしょうか。この日はサントニーニョの日でもありました。バチカン放送局の記事に「教皇は、フィリピン国民、特にすべての子どもたち、若者、家庭を、サントニーニョに託して祈られた」との言葉を見つけました。日本にいるフィリピンの皆さんは、サントニーニョ像を見てフィリピンで初めて洗礼を受けた先祖を思い感謝し、故郷から遠く離れた日本で、家族とりわけ子供たちに光と希望を与えてくださいと祈りながら大きな喜びとともに信仰を深めています。



パパモービル

昨年11月の38年ぶりのパパ様の来日は感動的でした。長崎球場や東京ドームで、教皇ミサが始まる前にパパ様が乗られていた車を皆さん覚えていらっしゃいますか？パパ様が一般謁見の時に乗られる車は、イタリア語でパパモービル (Papamobile) と呼ばれています。ヨハネ・パウロ2世が教皇として初めてポーランドを訪れた時に、信者に祝福を与えるために改造したトラックを使用して以来、様々なパパモービルが製作されました。今回教皇フランシスコが乗られていたのは、トヨタのMIRAIです。カトリック中央協議会がトヨタ自動車に依頼して製作された特注品です。地球の環境破壊に心を痛められているパパ様のために、二酸化炭素を排出しない燃料電池車の車両が用意されました。なんと、東京ドームで乗られていたパパモービルは、長崎で使用したものを急いで東京に運んだものではなく、2台は別の車だそうです。このほかにも、公道を移動する時に2台のMIRAIがトヨタ自動車からカトリック中央協議会に寄贈されたそうです。ナンバープレートはいずれも『SCV1』、SCVはState City Vaticanの略、SCV1は教皇専用車用のナンバーだそうです。

テゼ黙想と祈りの集い

今年も例年通り、下記の日程で行います。東京より黙想と祈りの会の方々が越し下さり集いをリードして下さいます。集いの後、信徒会館で茶話会を持ちます。どなたもお気軽にご参加ください。

日時：2020年2月22日（土）15：00～16：30

場所：カトリック水戸教会御聖堂



「聖書の集い」へのご案内

1月から毎週金曜日のミサ終了後に「聖書の集い」を開催しています。次の主日の福音を読み、また、良く聴き、感じたこと、心に残ったことなどを分かち合っています。サブテキストに幸田和生司教様の「福音のヒント」を使用していますが、勉強ではなく、福音により親しみ、福音を生きられるようにと企画しました。そして、一人ひとりの霊的な成長も勿論ですが、同じ信仰を持つ共同体の一員としての信頼や安心感も大切に生きていきたいと考えています。そのために、分かち合いで話されたことは、口外しないという約束をしております。毎週参加は難しいと思われる方でも、月に1回くらいと思われる方も大歓迎です。どうぞお気軽にご参加ください。